

辛く・悲しい思いをした経験は必ず看護活動に活かせるはず

宮城厚生協会
新入職員集会

宮城厚生協会（理事長水戸部秀利）では、4月1日、坂総合病院で新入職員集会を行いました。本来なら辞令交付式を行うはずでしたが震災の影響で、参加できない新入職員もいるために集会となったものです。水戸部理事長は専門職として技術を高めると共に民医連の心・魂を学んでほしい。新しい日本の復興のために若い力を発揮してともに困難を乗り越え、未来を切り拓いていきたいと思いますと話されました。

新入職員代表として、伊藤佳菜さん（石巻赤十字看護専門学校卒）が、震災の体験も含め挨拶しました。（以下全文）



新入職員代表として話す伊藤佳菜さん（看護師）

3月11日、私は学校のある石巻にいました。石巻は大きな被害を受けた場所の一つです。海が近くない場所であっても、一体が浸水し4時間外に出ることが出来ず食糧・水などを入手することは困難でした。私の住んでいた地域では地震から1週間以上経ってもライフラインが復旧することはありませんでした。今まで普通に生活してきたことがどんなに幸せだったか資源の大切さを実感しました。そして石巻にはもう、3年間生活してきた通学路や街並み、学校生活の思い出の場所はどこにもないのです。

そして私にはもう一つ。私の実家は仙台市若林区荒浜にあります。10分も歩けば海水浴場があり、幼い頃から海の近くで育ってきました。地震から10日目、荒浜に向かう車の中で、海に近づくにつれて見えてくる変わり果てた景色。そこに私の育ってきた場所はありませんでした。石巻でもたくさん被災した現場を見てきたはずなのに、涙と震えが止まりませんでした。一面の田んぼの風景、ぐしゃぐしゃの車、逆さになった車があふれ、家の屋根や瓦礫の山が辺り一面に広がり、私の帰る場所はどこにもありませんでした。家から小学校や松林、海が見えたことはありません。しかし今は違います。どこを見ても瓦礫だらけの同じ風景です。家は基礎しか残っていません。

「人のためになる仕事がしたい」と思い志した看護師への道。いざ災害が起きてみると何もできない自分。そんな自分が無力で悲しく、情けありませんでした。最近では被害が比較的少なかった場所では復興に向け、前へ進み始めています。私も家族と新しい場所での生活を始めています。悲しいことに今の環境に慣れ、落ち着いてしまうと、時間とともに記憶は薄れてしまいます。引きずってばかりはいられないけど、忘れてたくない、忘れてはいけないと強く思ってしまう。

今回の大規模な災害により、大切な人を亡くした人、家や故郷を無くした人、地震の恐怖に怯えた人、たくさんの被害に遭いました。しかし、同時に人の温かさ、繋がりをを感じることもできました。失ったものは多すぎて、大きすぎますがその中でも得たものはあるはずです。今回の災害でたくさんの辛い・悲しい・苦しい思いをしたからこそ、私たちにはその思いを分かちあえることが出来るのではないかと思います。一人ひとりが出来ることはちっぽけでも、それが集まると大きな力になります。

「笑顔は無敵」笑顔は伝染すると私は思います。だからこそ私は笑顔のある、そして笑顔を与えられるような看護師になりたいと思います。今回の経験を忘れず、この出来事を無意味なものにしないため、今後の看護活動に活かせるよう、精進していきたいと思っています。これからの未来にたくさんの笑顔がありますように…。

2011年4月1日 坂総合病院看護師 伊藤 佳菜



若い皆さんの力も結集して必ず復興をと水戸部理事長



犠牲者のご冥福を祈り黙禱する新入職員の皆さん



全日本民医連藤末衛会長からビデオメッセージ